

# 所有感が拡張的パーソナルスペースに及ぼす影響<sup>1)</sup>

## The Effects of Psychological Ownership on Expansive Personal Space

上田 紫帆<sup>2)</sup>・藤田知加子<sup>3)</sup>

Shiho UEDA and Chikako FUJITA

### 要 約

人は、暗黙のうちに自分と他者との間に、自身にとって快適な適切な物理的距離（パーソナルスペース）をとる。有賀（2016）は、パーソナルスペースが自分の所有物を取り巻く空間にも拡大するという概念である、拡張的パーソナルスペースに関する証拠を示唆した。本研究では、物体に対するパーソナルスペースの拡張は、物体に対する所有感によって引き起こされるか否かを検証した。サクラに対する好意度を操作し、実験参加者が机に置いたかばんとサクラのかばんの間の空間距離を測定した。この測定は、実験参加者自身のかばんと実験者が手渡した一時的なかばんに対して2回行った。実験の結果、実験参加者自身のかばんに対してのみ、サクラへの好意度の程度に応じてかばん間の距離が短くなることが示された。すなわち、物体への所有感が拡張的パーソナルスペースに寄与することが示された。

キーワード：拡張的パーソナルスペース, 所有感

### はじめに

人間は暗黙のうちに、他者との間に自分にとって心地の良い一定の距離をとる。Sommer（1959）は、この空間領域に対してパーソナルスペース（Personal Space：以下PS）と名付け、社会的相互作用をしている個人が所有する目に見えない空間と定義した。このPSには、自己と他者の関係に基づきその距離を柔軟に拡大・縮小する性質があり、PSの大きさを決定する要因として、性差、人種差、年齢差、社会的地位、好意度などが挙げられている（青野，2003；Baxter，1970，三井，

1) 本研究は2021年度研究プロジェクト論文（承認番号：21-016）として南山大学人文学部心理人間学科に提出されたものに、加筆修正したものである。

2) 人文学部心理人間学科卒業生，現所属：株式会社 日本通運

3) 所属：南山大学人文学部

1981より引用；Giesen & McClaren, 1976；池上・喜多, 2007；野瀬他, 2005；山口・山, 2016)。

たとえば、山口・山 (2016) は親しい相手よりも、知らない相手や親しくない相手と対面するときの方がPSは大きくなることを明らかにした。すなわちPSは、防衛的個人空間の役割を持つといえる (深田・大坂, 2018)。

この役割は、他者の侵入を防ぐ空間という意味で、動物の持つテリトリーと類似した概念ともいえる。テリトリーとは動物学では、ある個体、家族、群れが占有する、他の個体の侵入に対してそれを阻止する行動を示す地理的範囲とされている (三井, 1981)。しかしながら、テリトリーはその中心が明確ではなく、かつ境界線に目印が明確にあり、他者の侵入に対して個体は攻撃行動をとるのに対して、PSはその中心は個体の身体であり、かつ境界線の目印がなく他者の侵入に対しては回避行動をとるといった違いのある、異なる概念である (Sommer, 1959)。

従来、PSという概念は、他者とのコミュニケーションを目的とした場面を想定した、「対人距離」を説明するために使用される場合と、他者から自己を守り、快適空間を確保するための「人を取り巻く空間」を説明するために使用される場合とがあった。本研究では後者としてPSを定義する。

### 物体におけるPS

PSには快適空間を守るという役割があり、人間は物体を用いてその快適空間を確保したり主張したりすることが明らかとなっている (Insel & Lindgren, 1978 辻・渋谷・渋谷訳1987)。物体を用いた自分のPSの主張は、快適空間の確保に有効な手段であるにも関わらず、従来のPS研究では対人間の距離あるいは人と物体との距離に焦点が当てられ、所有する物体同士の距離に関してはほとんど検討がなされていない。

そのようななかで有賀 (2016) は、自己の所有する物体と他者の所有する物体の間に存在する空間に着目し、所有物間のPSについて検討した。具体的には、サクラの所有物であるかばんと実験参加者の所有物であるかばんとの間の距離が、控室で待機している間のサクラの態度によって操作された、サクラに対する好意度の影響を受けるか否かを検討した。実験の結果、サクラに対する好意度が低い群の方は好意度が高い群よりも、自身のかばんをサクラのかばんから遠く離れた位置に置くことが明らかとなった。さらに、サクラと実験参加者が同性ペア (男性-男性)の方が異性ペア (男性-女性)よりも、自身のかばんをサクラのかばんから遠い位置に置いた。これらの結果は、対人間で確認されてきたPSの特徴と同じであることから、有賀 (2016) は所有者のPSが所有物を取り巻く空間にも拡張すると主張し、これを拡張的パーソナルスペースと称した。加えて考察において、拡張的パーソナルスペースは拡張自己の結果である可能性について触れている。しかしながら、拡張自己がどのような概念であるのかについては詳細には言及しておらず、物体にみられた拡張的パーソナルスペースが拡張自己の結果であることを直接的には検討していない。

### 拡張自己の定義とその生起プロセス

一般的に拡張自己は、身体を越えて自己を感じる状態と定義され、そのような仕組みを特に自己拡張という (Belk, 1988；神山, 2012)。人間は、対象に拡張された客体としての自己を通して自己を内観し、自己像の拡張や強化を行う。そして所有している物体も同様に自己像の拡張・強化の役割を持つ (Belk, 1988；池内・藤原・土肥, 2000)。

Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981, 朴, 2007より引用) は、所有物が拡張自己として自己の一部になるためには、所有物に心理的エネルギーを注入し、個人的意味を付与することが必

要であるとした。心理的エネルギーとは、人が所有物を使用する過程でつぎ込まれる、関心や労力、時間などを指す。心理的エネルギーを多く注入し、多様かつ鮮明な個人的意味付けを行うことで、所有者にとってその所有物は自己概念と切り離せない物体になり、拡張自己として取り込まれると考えられている。同様に、神山（2012）は物体への拡張自己の生起プロセスを7つの段階に区分した。すなわち、自己に基づく商品選択、商品獲得への資源投資、使用における資源投資、獲得後のきずなの形成、新しい・未知な自分の発見、収集の段階、そして回想である。物体が拡張自己とみなされるには、このような多くのプロセスを経る必要があるとみなされる。

有賀（2016）で用いられた物体は、実験参加者である学生が日常的に使用しているかばんである。通学に用いるかばんに対して、自己に基づく商品選択、商品獲得への資源投資、使用における資源投資などのプロセスは経ているであろうが、自己概念との一致性の確認やきずなの形成といった、物体を拡張自己とみなすための複雑なプロセスをとる必要は、必ずしもない。

### 本研究の目的と仮説

人間が物体に抱く心理的働きとしては愛着、満足感、幸福感、執着、ストレス、支配感、嫌悪などが考えられるが、そのうちの1つに所有感が挙げられる。有賀（2016）では、所有物そのものに対する所有感については検討されていない。そこで本研究では、所有感の多寡が拡張的パーソナルスペースの生起要因であるという仮説を立て、物体への拡張的パーソナルスペースと所有感の関係を明らかにすることを目的とする。具体的には、有賀（2016）の実験手続きを踏襲し、加えて実験参加者が持参したかばん（以下、私的所有物）と実験当日に一時的に渡された紙袋（以下、一時的所有物）とを用いて、所有物への所有感の多寡を操作することによって、所有感と相手への好意度に応じてPSが影響を受けるか否かを検討する。

本研究の仮説が正しければ、結果の予測は以下の通りである。第一に、サクラとの対人関係に基づいて所有物に対して拡張的パーソナルスペースが生起するため、有賀（2016）と一致した結果が観察されるであろう。具体的には、サクラへの好意度が高い群の方が、好意度が低い群よりも所有物間の距離は狭くなる。第二に、PSの拡張は所有感が高い場合にのみ生起するため、所有感と好意度の間には交互作用が認められるであろう。具体的には、所有感の高い私的所有物でかつサクラへの好意度が高ければ、所有物間の距離は縮小する一方、私的所有物でかつサクラへの好意度が低ければ、所有物間の距離は拡大すると予測される。これに対し、所有感の低い一時的所有物に対しては、サクラへの好意度は影響しないため、好意度が高い場合と低い場合の所有物間の距離に差はないことが予測される。

### 方法

実験参加者：大学生44名（男性18名、女性26名、平均年齢19.43歳、 $SD = 1.19$ ）が実験に参加した。実験参加者はサクラ（男性大学生4名、平均年齢21.75歳）と面識がない学生を対象とした。

実験材料：所有感の異なる2つの物体を用いた。所有感の高い私的所有物として、実験参加者自身のかばんを設定し、所有感の低い一時的所有物として実験者が実験開始時に渡した紙袋を設定した。紙袋の中には、実験で使用する質問紙と鉛筆を入れた。この紙袋は実験後、参加粗品を入れて持ち帰ることが伝えられた。なお、物体を置く順番が物体間距離に影響を及ぼさないよう、私的所

有物を先に置く群（好意度高群 10 名，好意度低群 12 名）と一時的所有物を先に置く群（好意度高群 10 名，好意度低群 12 名）を作成した。

質問紙：分析には使用しない製品の印象に関するダミー質問と，ペアの参加者（サクラ）に対する 10 段階による好意度評定，そして Iseki, Sasaki, & Kitagami (2022)<sup>4)</sup>による日本語版心理的所有感尺度を含んだ質問紙を用いた。

実験環境：8 m×7 m の教室（4 m×2 m の控室あり）を使用した。入口付近には実験参加者が一時的に座るための椅子 2 脚を横並びに置き，教室を区切るためのパーティションを配置した。実験室中央に実験参加者とサクラ用の机と椅子を用意した。実験参加者からは見えないように，パーティション奥と入口対面の壁際に長机（150 cm×45 cm）を 2 台配置した。実験室のレイアウトは Figure 1 に示した。

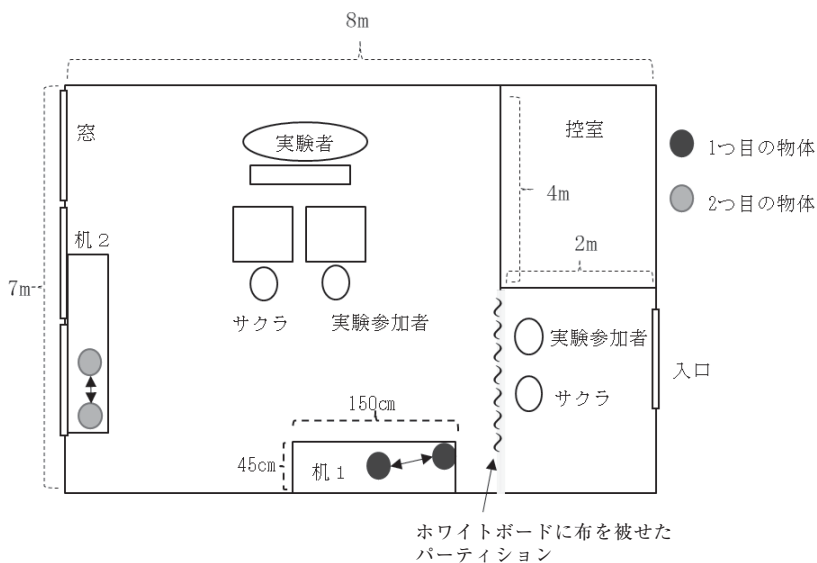


Figure 1. 実験室のレイアウト。

手続き：はじめに，実験室に集まった実験参加者とサクラは実験室入口の椅子に座るよう指示され，1 分間待機した。待機中に互いの自己紹介などをしておくように指示をし，実験参加者のサクラに対する印象操作を行った。好意度高群（統制条件）に対しては，サクラは積極的な会話を行った。反対に好意度低群（実験条件）に対しては，実験参加者からの質問への無視や頻繁なため息，携帯電話の使用，貧乏ゆすりといった印象低下行動をとった。

印象操作後，実験者は実験参加者とサクラへ，質問紙と鉛筆の入った紙袋を「実験で使うので持ってきてください」と伝えた後手渡し，2 人をパーティション奥へと案内した。次に入口付近の机に 1 つ目の物体（私的所有物または一時的所有物）を置くように指示をした。このとき，必ずサクラの物体が実験参加者よりも先に机上の左下側に置かれるようにした。1 つ目の物体を置いた後，2

4) 本尺度の日本語訳は，佐々木 恭志郎・井関 紗代・北神 慎司 (2019). 日本語版心理的所有感尺度の作成. 日本心理学会大会発表論文集, 83, 575. を参考にした。

つ目の物体を持ったまま実験室中央に配置された座席に座るよう指示し、実験への同意確認と偽の研究内容である、製品への印象と購買意欲に関する実験についての説明を行った。同意書へ署名後、2つ目の物体（私的所有物または一時的所有物）を実験室窓際の机に置くように指示をした。このときも、必ずサクラが先に物体を机上の左下側に置くようにした。2つの物体を置く順序が物体間距離に影響を及ぼさないよう、私的所有物を先に置く群（好意度高群 10 名、好意度低群 12 名）と一時的所有物を先に置く群（好意度高群 10 名、好意度低群 12 名）を設定し、順序の効果を相殺した。再び 2 人が着席後、2つの物体に対する所有感の質問紙への回答を求めた。

質問紙へ回答している間に実験者は各物体の距離を実験後測定できるように、両者の物体の最短距離にマスキングテープで目印を付けた。私的所有物と一時的所有物、それぞれに対する所有感への回答が終了した後、サクラは控室へ移動した。実験室に残った実験参加者はサクラへの好感度に関する質問紙に回答した。質問紙回収後、実験者は実験参加者へ真の実験意図に関するデブリーフィングを行った。

## 結果

実験に参加した大学生 44 名（好意度高群 20 名、好意度低群 24 名）のうち、好意度高群の 3 名が好意度評定において評定値 5、好意度低群の 3 名が評定値 6、1 名が評定値 7 を回答した。この 7 名は、好意度の操作が適切ではなかったとみなし、すべての分析から除外した。したがって以下の分析は好意度高群 17 名、好意度低群 20 名を用いて行った。

好意度高群に振り分けた実験参加者のサクラに対する好意度評定値は、平均値 8.41、標準偏差 1.18 であった。また、好意度低群に振り分けた実験参加者のサクラに対する好意度評定値は、平均値 3.50、標準偏差 1.15 であった。各群における好意度評定値の差を *t* 検定を用いて行った結果、好意度高群の好意度評定値が好意度低群の好意度評定値に比べ有意に高かった ( $t(35) = 12.83, p < .01$ )。

### 所有感尺度を用いた所有感の確認

日本語版心理的所有感尺度（原版）10 項目への回答が、原版と同様の因子構造を持つか否かを確認するために、R を用いて探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、固有値の減衰状態から原版と同様 2 因子構造が妥当であることが示された。しかしながら、項目 3（それと私には、たくさんの共通点がある）の因子負荷量が .33 と低い値を示したため、項目 3 を削除し再度探索的因子分析を行った。その結果、5 項目からなる第 1 因子と、3 項目からなる第 2 因子が抽出された。この因子構造について確証的因子分析を行ったところ、GFI = .88、AGFI = .77、CFI = .95、TLI = .93、RMSEA = .08、SRMR = .08 であり、適合度は十分であると考えられた。また、 $\alpha$  係数は第 1 因子が .82、第 2 因子が .70、尺度全体の  $\alpha$  係数は .82 であった。

因子分析の結果と、各項目の平均値および標準偏差を Table 1 に示す。



Table 1  
所有感尺度の探索的因子分析の結果と各項目の平均値および標準偏差

	因子負荷			<i>M</i>	<i>SD</i>
	第1因子	第2因子	共通性		
第1因子：自己・所有物関連感因子 ( <i>M</i> =2.51, <i>SD</i> =0.15)					
4 それは、自分のアイデンティティの中心である。	<b>0.92</b>	0.05	0.77	2.38	0.97
7 それは、私が望むようなアイデンティティを獲得する助けをしてくれる。	<b>0.91</b>	-0.04	0.87	2.70	1.11
8 私は、自分のアイデンティティの一部をそれから得ている。	<b>0.88</b>	-0.07	0.42	2.41	1.17
6 それは、私という人間の一部である。	<b>0.70</b>	0.08	0.30	2.38	1.17
2 それは、実際の自分になりたい自分のギャップを埋める助けをしてくれる。	<b>0.59</b>	0.22	0.31	2.68	1.07
第2因子：所有感因子 ( <i>M</i> =4.41, <i>SD</i> =0.41)					
5 それは、自分の所有物であるように感じる。	-0.14	<b>0.84</b>	0.60	4.35	0.94
9 私は、それに対して高い所有権を有していると感じる。	0.06	<b>0.71</b>	0.55	3.57	1.22
1 私は、それを所有しているような気がする。	0.07	<b>0.50</b>	0.29	4.49	0.79
寄与率	33%	18%			
因子間相関		.52			

この尺度における、所有物ごとの各下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。

Table 2  
所有物ごとの項目得点の平均値と標準偏差

	所有感高物体 (私的所有物)	所有感低物体 (一時的所有物)
自己・所有物関連感因子		
平均値	2.55	1.33
<i>SD</i>	1.09	0.63
所有感因子		
平均値	4.14	1.54
<i>SD</i>	1.09	0.84
全体平均	3.08	1.40
全体 <i>SD</i>	1.32	0.72

*n* = 37

所有物間の所有感の差を確認するため、*t*検定を行った結果、自己・所有物関連因子得点 ( $t(36) = 9.01, p < .01$ )、所有感得点 ( $t(36) = 15.78, p < .01$ ) およびそれらを総合した所有感得点 ( $t(73) = 14.36, p < .01$ ) において、私的所有物と一時的所有物間に有意差が認められた。いずれの因子においても、私的所有物の方が、一時的所有物よりも評定得点が高かった。したがって、本研究では私的所有物を高所有感物体、一時的所有物を低所有感物体とみなす。

### 所有物間の距離の分析

好意度群ごとの所有感別、物体間の距離の平均値を Figure 2 に示す。

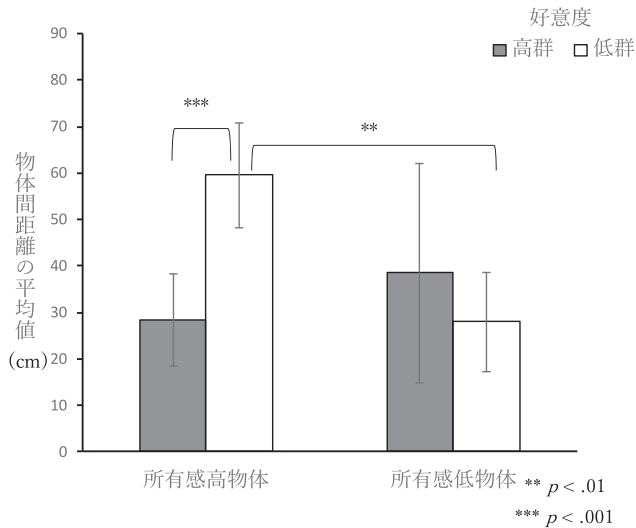


Figure 2. 好意度群および所有感条件別の物体間距離の平均値 (エラーバーは95%信頼区間)。

サクラの好意度と所有感が物体間の距離に及ぼす影響を確認するため、2 (好意度：高群，低群) × 2 (所有感：高 (私的所有物)，低 (一時的所有物)) の2要因混合計画分散分析を行った結果、好意度と所有感の交互作用 ( $F(1, 35) = 8.84, p < .01$ ) が認められた。好意度 ( $F(1, 35) = 2.28, n.s.$ ) と所有感 ( $F(1, 35) = 2.36, n.s.$ ) に主効果は認められなかった。有意な交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行ったところ、好意度の単純主効果は私的所有物においてのみ有意であり ( $F(1, 70) = 10.16, p < .001$ )、好意度が高い場合よりも好意度が低い場合の方がよりサクラの所有物との距離が遠いことが明らかとなった。一時的所有物においては、好意度の単純主効果は認められなかった。

### 考察

本研究は、物体への拡張的パーソナルスペースと所有感の関係を明らかにすることを目的とした。本実験の結果、好意度と所有感の交互作用が認められた。具体的には、実験参加者にとって所有感の高い私的所有物においては、相手への好意度が高い場合にはサクラの所有物の近くに置くのに対し、相手への好意度が低い場合にはサクラの所有物と離しておくことが確認された。一方で、実験参加者にとって所有感の低い一時的所有物では、好意度による物体間の距離に差は認められなかった。

私的所有物間の距離において好意度の影響が認められた点は、有賀 (2016) の結果と整合的であっ

た。このことから、拡張的パーソナルスペースは、再現性の高いものであるといえる。従来のパーソナルスペース研究の知見と本実験の結果から、所有物にも人間が持つパーソナルスペースと同様に、その範囲を柔軟に拡大縮小させることが可能な空間、すなわち拡張的パーソナルスペースが取り巻いていることが明らかとなった。

加えて、好意度の影響はその物体に対する所有感が低い場合には認められなかったことから、拡張的パーソナルスペースの生起には、物体への所有感が関係していることが明らかとなった。すなわち、所有感が高いものにはパーソナルスペースが拡張するが、所有感の低いものには拡張しないことが示された。このことから、所有感の多寡が拡張的パーソナルスペースの生起要因であるという本研究の仮説は支持された。

本研究では所有感を測定するにあたって、日本語版所有感尺度 (Iseki, Sasaki, & Kitagami, 2022) を使用した。この尺度は、自己との同一視の程度を測る「自己・所有物関連因子」と単純に持っているという意識を測る「所有感因子」で構成されていた。本実験で使用した一時的所有物である紙袋は、実験後に持ち帰ることを想定させたにも拘わらず、自己・所有物関連因子評定得点のみならず所有感因子評定得点も、私的所有物に対するそれに比して低かった。このことから、拡張的パーソナルスペースの生起には、自己との同一視といった心理的プロセス、すなわち、有賀 (2016) の示唆した拡張自己の生起を経ることが必要なのか、あるいは単純な所有感のみでも十分であるのかについては十分に弁別することができなかった。そのため、自己・所有物関連感が低く、かつ単純な所有感が高くなるような実験操作を行い、拡張的パーソナルスペースの生起因をさらに詳細に検討する必要がある。

物体を取り巻く PS については未だ検討されていない部分が多い。今後さらに拡張的パーソナルスペースに関する知見を蓄積し、所有物をも含めた快適な PS の精査が求められる。

#### 引用文献

- 青野 篤子 (2003). 対人距離の性差に関する研究の展望 従属仮説の観点から 実験社会心理学研究, 42, 201-218.
- 有賀 敦紀 (2016). 拡張的パーソナルスペース 所持品間の距離に反映される所有者の対人距離 心理学研究, 87, 186-190.
- Baxter, J. C. (1970). Interpersonal spacing in natural settings. *Sociometry*, 30, 444-456. (三井 宏隆 (1981). Overt behavior としての Personal Space 研究の展望 実験社会心理学研究, 21, 65-76. より引用)
- Belk, R. W. (1988). Possessions and the extended self. *Journal of Consumer Research*, 15, 139-168.
- Csikszentmihalyi, M., & Rochberg-Halton, E. (1981). *The meaning of things: domestic symbols and the self*. Cambridge; New York, Cambridge University Press. (朴 宰佑 (2007). 象徴的消費とは何か——拡張された自己としての商品——神戸国際大学経済経営論集, 27, 27-47. より引用)
- Giesen, M., & McClaren, H. A. (1976). Discussion, distance and sex: Changes in impressions and attraction during small group interaction. *Sociometry*, 39, 60-70.
- 深田 博己・大坂 理紗 (2018). 他者の所有物による個人空間の侵害——被侵害者における心理・行動的反応と対人恐怖心性との関連——対人コミュニケーション研究, 6, 29-51.
- 池上 貴美子・喜多 由香里 (2007). 対人距離に関する性・年齢・魅力・親密度の要因の検討 金沢大学教育学部紀要 教育学編, 56, 1-12.
- 池内 裕美・藤原 武弘・土肥 伊都子 (2000). 拡張自己の非自発的喪失——大震災による大切な所有物の喪失調査結果より——社会心理学研究, 16, 27-38.



- Insel P. M., & Lindgren H. C. (1978). *Too close for comfort: Psychology of crowding*. Oxford; England, Prentice-Hall. (インセル P. M., リンドグレン H. C. 辻 正三・渋谷 昌三・渋谷 國枝 (訳) (1987). 混みあいの心理学 快適空間を求めて 創元社)
- Iseki, S., Sasaki, K., & Kitagami, S. (2022). Development of a Japanese version of the Psychological Ownership Scale. *PeerJ*, 10: e13063. <https://doi.org/10.7717/peerj.13063>
- 神山 進 (2012). 商品による消費者の自己拡張 彦根論叢, 391, 108-123.
- 三井 宏隆 (1981). Overt behavior としての Personal Space 研究の展望 実験社会心理学研究, 21, 65-76.
- 野瀬 出・雨森 雅哉・中尾 彩子・松尾 千尋・山岡 淳 (2005). パーソナルスペースへの侵入に対する心理・生理的反応——接近者の印象による影響——文京学院大学研究紀要, 7, 263-273.
- 朴 宰佑 (2007). 象徴的消費とは何か——拡張された自己としての商品——神戸国際大学経済経営論集, 27, 27-47.
- Sommer, R. (1959). Studies in Personal Space. *American Sociological Association*, 22, 247-260.
- 山口 千晶・山 祐嗣 (2016). 現実世界状況法によるパーソナル・スペースの測定 対人社会心理学研究, 16, 1-8.